OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教育改革の現状と今後について
Author(s)	小林, 傅司
Citation	大阪大学ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）フォーラム報告書. 2016, 27, p. 8-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

情報提供

「教育改革の現状と今後について」

配付資料

情報提供「大阪大学の教育改革トレンド」
発表者　小林　傅司　理事・副学長（教育担当）

私が理事・副学長になったのは先々週の火曜日か水曜日で、まだ 2 週間経っていないという状況です。にもかかわらず、それ以前から決まっていた様々なスケジュールは当然引き継がなくてはならず、このファカルティ・ディベロップメント・フォーラムにおいても、最初の部分の話をするということは、引き継いだ直後から聞いておりました。

ただ、当初の案では東島前理事が学事暦についてお話をすることになっておりました。今回の執行部の交代、総長の選考のプロセスにおいて、皆さまもご存じだと思いますが、学事暦の問題については、さまざまな部局を含めて、このまま決めていっていいのだろうかという声が聞こえ始めておりました。当時、候補だった西尾総長の所信表明でも、こういう教育の根幹に関わるような問題の一つを決定するときには、もう少し丁寧な議論が必要ではないかと訴えられ、少なくともこのプロセスをもう一回見直すということを公約に掲げられていたことはご承知のとおりです。

新執行部が発足した段階で、来年度から始まる中期計画について、やや修正と見直しを行い、文部科学省と協議いたしました。その結果、われわれの提案する修正は、文部科学省としても、新たな執行部が総長のリーダーシップの下にお書きになるということを考えて、当然尊重したいという形で受け取っていただき、第 1 回の本学の教育研究臨時評議会において、中期計画の素案の若干の修正をお認めいただきました。

もちろん素案ですので、来年 4 月から始まる中期計画期間に向けて、中期計画の中身そのものについては文部科学省といろいろとやりとりする機会はあろうかと思いますが、我々としては当初の中期計画案に「学事暦（クォーター制）の導入を」と書いてあったものを、かっこの部分を削除して「新たな学事暦の下に」という書き方に変更しました。

その変更・修正を受けて、西尾総長から教育担当の副学長である私に、学事暦についてもう一度学内の合意形成を取るようにという指示が出ております。現在考えている段取りは、まず現行の学事暦のパターン、それから東島前理事が取りまとめられたクォーター制という学事暦のパターン、それから他大学がどういうものを使っているかを調べてそれを二つほどに類型化して、それぞれの学事暦のパターンのメリットとデメリットを書き込んだ形のものを作っております。

その中身を教育室、今度は室体制というシステムで運営していきますが、その室体制の中で議論を重ねた上で、従来から行われてきた教育改革推進会議に諮り、各部局の皆さまにアンケートという形で「こういう学事暦のパターンがありますが、いかがでしょうか。どれが望ましいとお考えでしょうか」と、ご意見を伺おうと考えています。ですから、現時点で東島前理事たちがお作りになったクォーター制をやめるという決定をしているわけではありません。その案も含めて、もう一回立ち止まって考えてみる機会を作りたいと考えております。

ですので、今日、当初予定されていた、これからの学事暦はこうなりますという形の講演は、今、私にはできない状況にあるということで、お話の内容を変えさせていただいたわけです。それに基づいて、本来ならば皆さまに配付すべき資料が配付できなかったというところもお詫びしたいと思っております。

今、大学は教育に関する改革を非常に求められています。その一つは、新しい学びのスタイルとしての知の統合学習であり、あるいはイノベーション対応、グローバル化などです。そうした大学が置かれている状況、方向性は、我々としては拒否し難い、当然取り組むべき課題だと理解しております。

他方、大阪大学は、従来から教育目標として、確固たる基礎学力、専門知識を踏まえた上で、教養とデザイン力と国際性を大事にするということを掲げてまいりました。こういう部分を堅持した上で、スーパーグローバル大学構想をどのように実現していくかが、現在の課題だと思っています。

（以下、スライド併用）

##

そうすると、スーパーグローバルを申請したときに、グローバル化対応のところで幾つかの項目が書いてあります。「クォーター制」と書いてあり、3 学期制の導入が最初に私がお話しした件で、ここだけは若干見直しましょうということですが、外国人教員の増加、留学生受入れ、海外派遣の増加、グローバルビレッジの形成といった項目をお約束したわけです。ここからが、是非皆さまにご理解いただきたいことなのですが、スーパーグローバル大学構想は、やや執行部主導で作られていたために、各部局の方々から見るとあまり我が事として受けとめられていないというところが問題です。また、非常に多くの数値目標を約束してしまっております。例えば、留学生受入れの人数も、学部生の 15%は留学生にするとか、外国人教員もたくさん入れますということで、資料にも割合が 8〜15%と書いてあります。それから、派遣 4〜8%と書いてあります。これは個々の部局、具体の教育現場を持っておられる先生方のご協力がなければ、到底達成できない数値目標です。

この達成は非常に困難だろうと思っております。今後様々な機会を通じて部局の先生方にもご協力のお願いをすることがあろうかと思いますので、その際には嫌な顔をせずに、できることは是非ご協力いただきたいと思っております。

##

カリキュラムに関しても、今、ナンバリングの検討が止まっておりますが、これは再開するつもりです。それから GPA 制度、シラバス。シラバスの英語化などに着実に取り組んでいきたいと思っています。

それから、MOOCs（ムークス）のような国際発信をするの講義の導入、これは今日の講演の反転授業と裏表の関係になってまいりますので、こういうものも推進していく。それから大学院学生向けの FD、ティーチングフェローの制度化なども検討しております。さらに、語学教育、入試などの改善は、これから大学が取り組むべき重要な課題だと理解しています。

##

そういう点で、今、大学を取り巻く環境の変化が起こっており、教育に関する非常に重要な論点として、高大接続が議論になっています。今まで高大連携という言葉がありましたが、最近は高大接続という言葉を使うようになっています。そして、文部科学省の審議

会で答申が出ているわけですが、そこでは高等学校の教育と大学の教育と入学者選抜の一体的改革という言い方で表現されております。

例えばこんな考え方です。まず、高校の教育を変えると。新聞などでご存じかもしれませんが、高等学校基礎学力テストみたいなもの、高校の教育の達成度合いを測定するようなテストを作る。そして、その達成度合いのテストを使って高校の教育を改善するというサイクルを回したいわけです。それと連動して、何を教えるべきかという中身に関しても、指導要領をこれから変えると言っています。

ここでのメッセージは、高校の教育を新しいタイプに変えましたということです。だから、大学はそういう新しい学びを受けてきた高校生に対して、相応しい大学教育をしてくれるのでしょうねという問い掛けがあります。その関門のところに、大学入学希望者学力評価テストというものを置きたいということで、センター試験に代わる形でこういうものが導入されようとしています。

このプロセスの中で、では大学はどうするかというときに、高校の学びの変化に対応して、どういう学生を採りたいのかを明確に書いて、その学生にどんな教育をするのかを明確にする。その結果、何ができる学生になったのかをきっちりと書いて、達成した上で社会に送り出す。現在、こういう理想が掲げられてさまざまな議論がなされているということを、ご理解いただきたいわけです。

##

試験のイメージです。先ほど言った基礎学力テストは一種の絶対評価で、達成水準を見ましょう、高校の教育が上手くいっているかどうかを見ましょうというものです。大学に入学するための新しいタイプのテストだと言っていて、この詳細設計はまだ明らかになっていないので、これが本当にどんなものになるかは分かりません。

上に三つ、「これからの学びの 3 要件」と言われているものが並んでいます。高校の教育でもそうなのですが、知識・技能は当然大事ですが、それに加えて思考力・判断力・表現力が大事で、さらに主体性・多様性・協働性となっています。高校までの間に、知識・技能の基礎的なところはちゃんとやっておきます。そして若干、思考力や判断力、表現力などもやるような形にしておきます。だから、大学が選抜するときには、知識・技能だけを選抜するような試験はやめてくれ。そして、思考力・判断力及び主体性・多様性に力点を置いた入試をやってくれ、選抜をやってくれというメッセージが来ているということです。

##

工程表です。現在、27 年度の後半に入ってきているわけですが、一度、各部局でアドミッションポリシーやカリキュラムポリシーの検討をお願いしたと思いますが、もう一度、具体的に明確に作業をお願いせざるを得なくなると思います。

大体、平成 37 年度以降にこういうものになっていくというのは、高校の学習指導要領を変えますので、その新しい指導要領による卒業生が出てくるのが大体このあたりからだということで、ここから本格的に高大接続が始まります。ただ、これは試験の新しいスタイルが上手くできるかなど、まだまだすっきりとはしていないようなので、文部科学省は「取扱注意」としています。

##

最後の方ですが、高大接続に関する中教審答申のところで、確かな学力の 3 要素として、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性の三つが必要で、大学は特に下の二つの部分をちゃんと見た選抜をしてください。大学に入ってからは、ここを非常に強調した新しい教育を行ってくださいというのがアクティブラーニング、学び方の変換という言葉に出てきているものだということです。

大阪大学は、ディスカッション型の授業やアクティブラーニングには、全国の大学の中では割と早く取り組んできたと思います。ただ、ここ数年、むしろ他大学が新しい教育観に対応したカリキュラムの変更、あるいは教育組織の改編等についてはだいぶ先行し始めています。例えば、九州大学、東北大学、東京大学、京都大学も、初年次教育やアクティブラーニングに資源を投資して、新しい動きを示しています。ですので、大阪大学としてもこれからそういうものを、もう一度復活させていきたいと思っております。

##

今年から高大接続で理系のプログラムとして SEEDS プログラムが始まっています。これは豊中の理学部、工学部、基礎工学部の先生方を中心に、近隣を中心とした高校生を対象に、夏休みに本当の研究、具体の研究現場に招き入れることで、研究の実感を湧かせるということをやっております。1 次選抜で選ばれた生徒に研究というものの概略を理解させ、2 次選抜で選ばれた生徒には実際に課題研究などをやってもらい、その成果を発表するというプロセスを取ろうとしています。

これが新しい学びと言われているものに対して大学が取り組むべき事例の一つで、今後こういうものがもっと求められていくだろうと思っています。取りあえずは、これはスーパーサイエンスハイスクールという高校の理科教育の特別によくできる高校生を中心にしておりますが、同じようにスーパーグローバルハイスクールというスーパーサイエンスハイスクールの文系版みたいなものがあり、そちらの方からも要請が来ています。そういうものにこれから取り組んでいく。そして、そのことを通じて、恐らく我々は入試というものを根本的に考え直すことが必要になってくるだろうと思っています。

##

最後にまとめで、現在、私が課題だと思っていることです。一つは、スーパーグローバル大学という構想、これに対してはきちんと対応しなくてはいけない。これは全学的にご協力いただかなくてはならないということです。それはグローバル化対応であり、語学教育の刷新であり、カリキュラムの改定やナンバリング、シラバスといったものを全部やっていかなくてはいけません。

それから、今、申しましたように、高大接続を強化していかざるを得ない。そうすると、これは入試改革に直結してまいりまして、今、我々は、一般入試や推薦入試、AO 入試と、区別して選抜をしていますが、間もなくこの区別がなくなる時代がまいります。大学の入学選抜は、こういう区別とは別のレベルで考えなくてはいけないという状況が間もなくまいりますので、それに向けた学内、あるいは部局での検討をお願いするということもあるかと思っています。

その上で、やはり阪大の教育の特色の堅持と発展が、大事なことだと思っております。先ほど申しましたように、教育のモットー「教養」「国際性」「デザイン力」は、ちゃんと維持してまいりたい。それから、最近は他大学にだいぶん真似られておりますが、大学院まで含めた高度教養教育が大事だと思っております。

この間、文系部局不要論などという議論が話題になりましたが、あの文部科学大臣の通知文書の話題となった文言の次のページには、「学部・大学院教育における教養教育を充実させること」とも書いてあります。あまり注目されておりませんが、大学院の教養教育を充実させろと文部科学大臣が言ったのは初めてだと思います。そういったことが、やはりこれから必要になります。

それとの関係で申しますと、今日は時間がありませんので説明いたしませんが、いわゆる大学院だけではなく学部でもそうですが、専門的な基礎的な知識以外に、もう少し汎用性がある能力、イギリスなどでは Researcher Development Framework という言い方で、研究者を養成するための様々な多面的な能力をちゃんと養成することによって、研究者だけではなく、様々な場面で活躍できる知的人材が作れる。それを日本では知的プロフェッショナルといったりしていますが、そういう教育がこれから求められていくだろうと思っています。

最後に、大学院教育改革には、まだあまり手が付いていないように思います。しかし、これはかなり大事な問題だと思っております。とりわけ皆さんに申し上げたいのは、大学院の入試の選抜機能がかなり低下しているのではないかということです。大学院を重点化して定員を充足することが求められているわけですが、研究科によっては大学院の選抜機能が低下している。以降、そのために、入ってきた学生に対する指導のために相当の手間と時間が取られているような部局もあると聞いております。そのこと自体が、先生方の研究にとってマイナスに働くという悪循環があります。しかも日本全体で見ると、こういうことが 10 年も続くと、日本の基礎研究力が大幅に低下していくという非常に厄介な問題があろうかと思います。ですので、大学院の在り方をどうするかということも、いずれは皆さまと共に考えていきたいと思っております。

時間がそろそろまいりましたが、今日はあえて FD と直結はしていないような話も含めてお話しさせていただきました。東島前理事からの引き継ぎのときに、東島前理事に「先生、一番苦労されたことはどういうことでしたか」と聞くと、「部局長以外の先生方とお話をする機会というか、チャンネルがなかなか作れないことが大変だった」という言い方をされていました。そこで、今日は非常に限られた機会だとは思いますが、FD 研修にいらっしゃっている先生方は、こういう問題に対してわざわざ来てくださるわけですから関心も高かろう、是非こういう問題提起をしてみたいということで、やや大きめのお話をさせていただいた次第です。どうもご清聴ありがとうございました。これからの研修が有意義なものとなるようにしたいと思っております。よろしくお願いいたします（拍手）。

教育改革の現状と今後

平成27年度大阪大学ファカルティ・
ディベロップメントフォーラム

教育担当副学長
小林傳司

スーパーグローバル大学構想から

共通評価項目 1

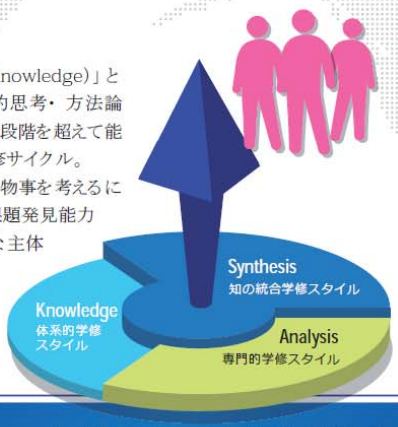
世界適塾

世界適塾構想

- 「物事の本質を見極める」高いレベルの学問を追求し、専門性を究める。
- 専門分野を超えた能動的な「知の統合学修」を行う。
- 知識・技能・経験・立場が異なる人々の相互理解と協働による「コラボレーティブ・イノベーション」を推進。

知の統合学修

「体系的学修で獲得した知識(knowledge)」と「専門的学修で追求した論理的思考・方法論(analysis)」を、時に専攻や学修段階を超えて能動的に統合(synthesis)する学修サイクル。一定の専門性を有する人材が、物事を考えるに当たり欠かせない広い視座と課題発見能力を獲得し、異なる社会の多様な主体の人々との幅広い協働(コラボレーション)を通じて自らのアイデアを現実のものとする上で、効果的に作用する。



コラボレーティブ・イノベーションを推進する人材

- 世界に通用する高度な専門知識を有す
- 人類の遺産としての豊かな教養
- 問題を発見し、解決の道筋を創るデザイン力
- 領域を超えるコミュニケーション力
- 調和ある多様性の創造に寄与する実現力

様々な要因が複雑に絡み合っている地球規模の社会的問題を解決するとともに、
最先端の科学や技術の発展を推進し、人間性豊かな社会の創造に大きく貢献する、
グローバル社会のトップリーダートップレベルの研究者、高度専門技術者を育成する。

大阪大学の教育目標

教養

市民の信頼を得られる
社会的教養・判断力

知の協奏と共創

国際性

異なる文化とのコミュニケーション力

デザイン力

自由な想像力、横断的な構想力

共通評価項目 2

世界適塾

大学改革、グローバル化の目標・ 取組 1)

世界標準への対応に係るグローバル化

1. クォーター制（3 学期制）の導入（平成 29 年度～）
   学生の主体的学修時間の確保、留学生受入の推進、全学横断的教育やまとまった研究時間を確保
2. 優秀な外国人教員の増加（平成 29 年度当初までに倍増させ、本構想期間中に割合を 15% まで引き上げる）
   特別教授制度、年俸制、クロス・アポイントメント制度等の柔軟な人事・給与制度を最大限活用
3. 留学生受入れ・海外派遣の増加（平成 32 年度までに倍増 受入れ：8→15%、派遣：4→8%））
   大学間協定数の増加、英語による授業科目・コース（ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー含む）の増加、サマープログラムの増加、新たな私費外国人留学生特別入試の実施等により実現
4. グローバル・ビレッジの形成
   （平成30年度当初までに学生寮を約1,100→1,400戸とし、充足状況を考慮しつつ、36年度当初までに更に600戸を整備）
   教職員を含め約 2,600 戸規模を整備（学生寮の２５％を日本人学生に提供）
   PFI 方式等を生かした持続可能な計画により着実に実施

グローバル化に対応するガバナンス強化

5. 年俸制教員の増加（平成 29 年当初には承継教員の約 2 割）
6. 大学教育のグローバル化に対応した FD の推進、国際公募の原則 100% 実施
7. 事務職員の語学力向上（平成 35 年度までに外国語力の基準を満たす職員数を現行の 3 倍に増加）
8. URA・IR によるサポート体制、HP や学内公文書の多言語対応化

世界適塾

大学改革、グローバル化の目標・ 取組 2)

国際通用性を備えた教育基盤の整備と教育の質保証

1. ナンバリングの全学導入（平成 33 年度にかけ段階的に実施）
   総授業科目数の精選、学位プログラムの体系化の過程と並行して実施
2. GPA 制度の実質化、シラバスの完全英語化
3. 国際通用性のある教育の質保証、edX 提供の MOOCs を介した国際水準の講義の導入
4. 大学院学生向けプレ FD の実施など体系的な教育力のトレーニング
5. Teaching Fellow の制度化を含めた新たな TA 制度の開始
6. 新たな AO 入試の全学的実施、TOEFL の一層の活用（平成 29 年度～）
7. 入学から卒業後までの学生の実態に関する情報や、多言語による教育情報の公表

財政基盤の強化

8. 創立 100 周年に向けた寄付金 100 億円獲得のための卒業生対策
   卒業生室を設置し活動を強化、2024 年までに基金目標額：60 億円（現在の約 3 倍）
9. 外部資金獲得のための URA による分析・コンサルテーション体制の整備

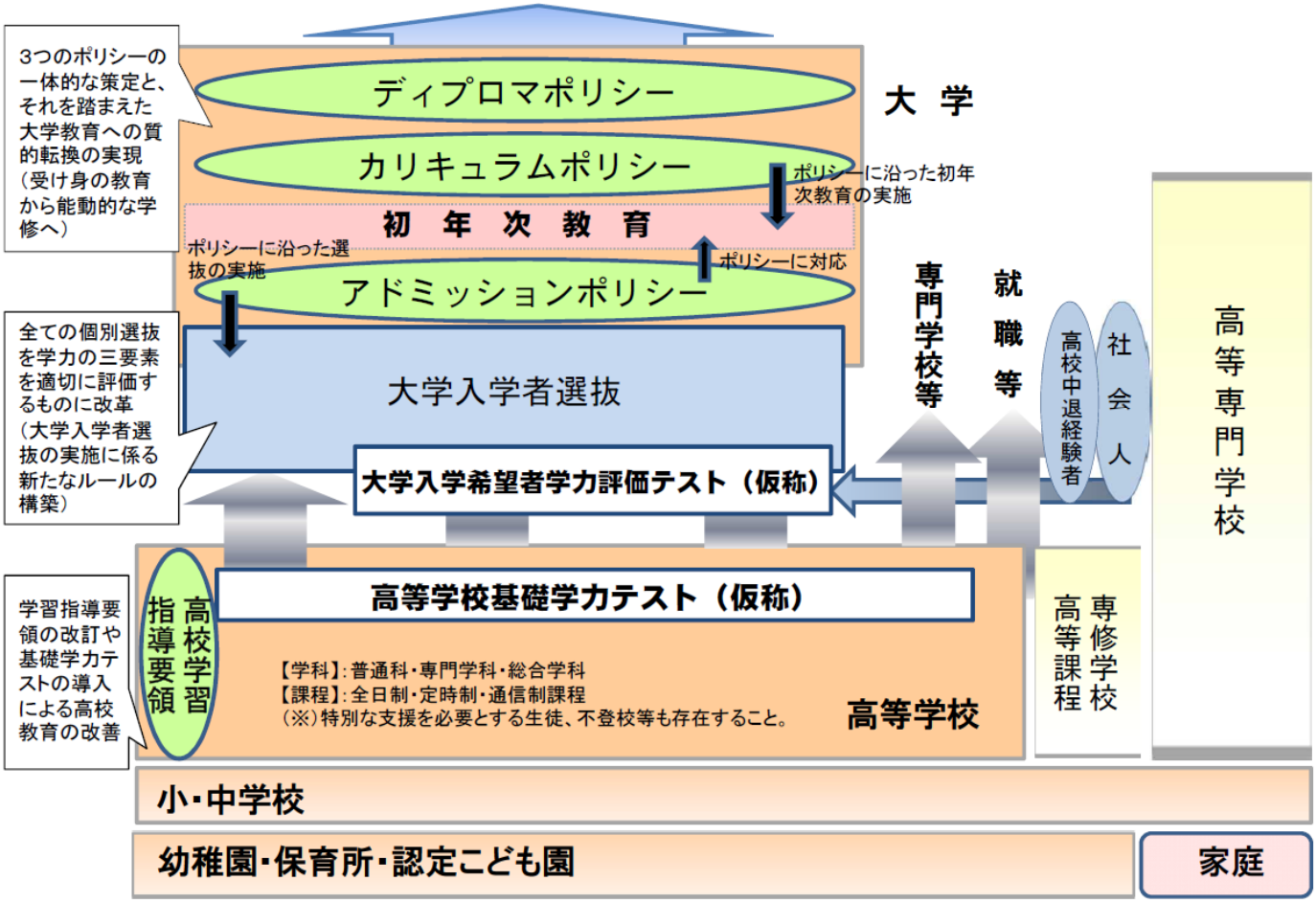
高等学校教育、大学教育、
大学入学者選抜の一体的改革

高大接続

資料２－１

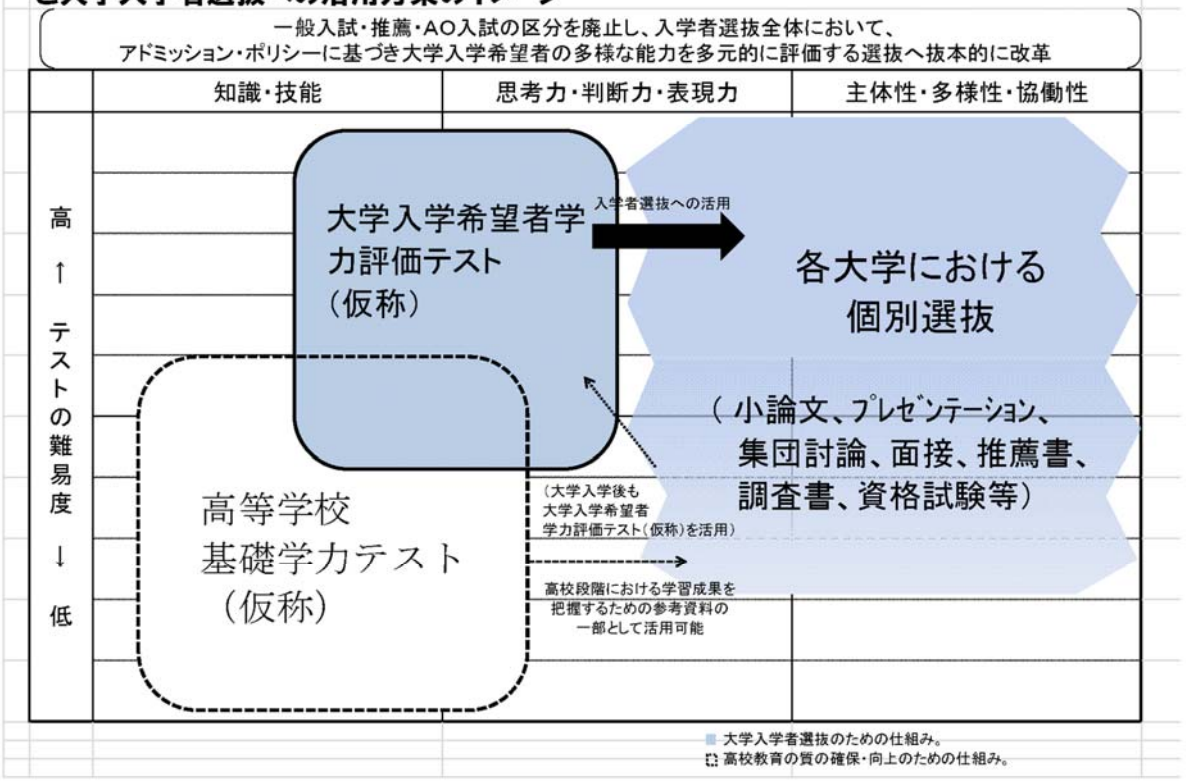
初等中等教育から大学教育までの一貫した接続イメージ

社会への送り出し（学校教育の入り口から出口まで一貫して社会との関係を重視）



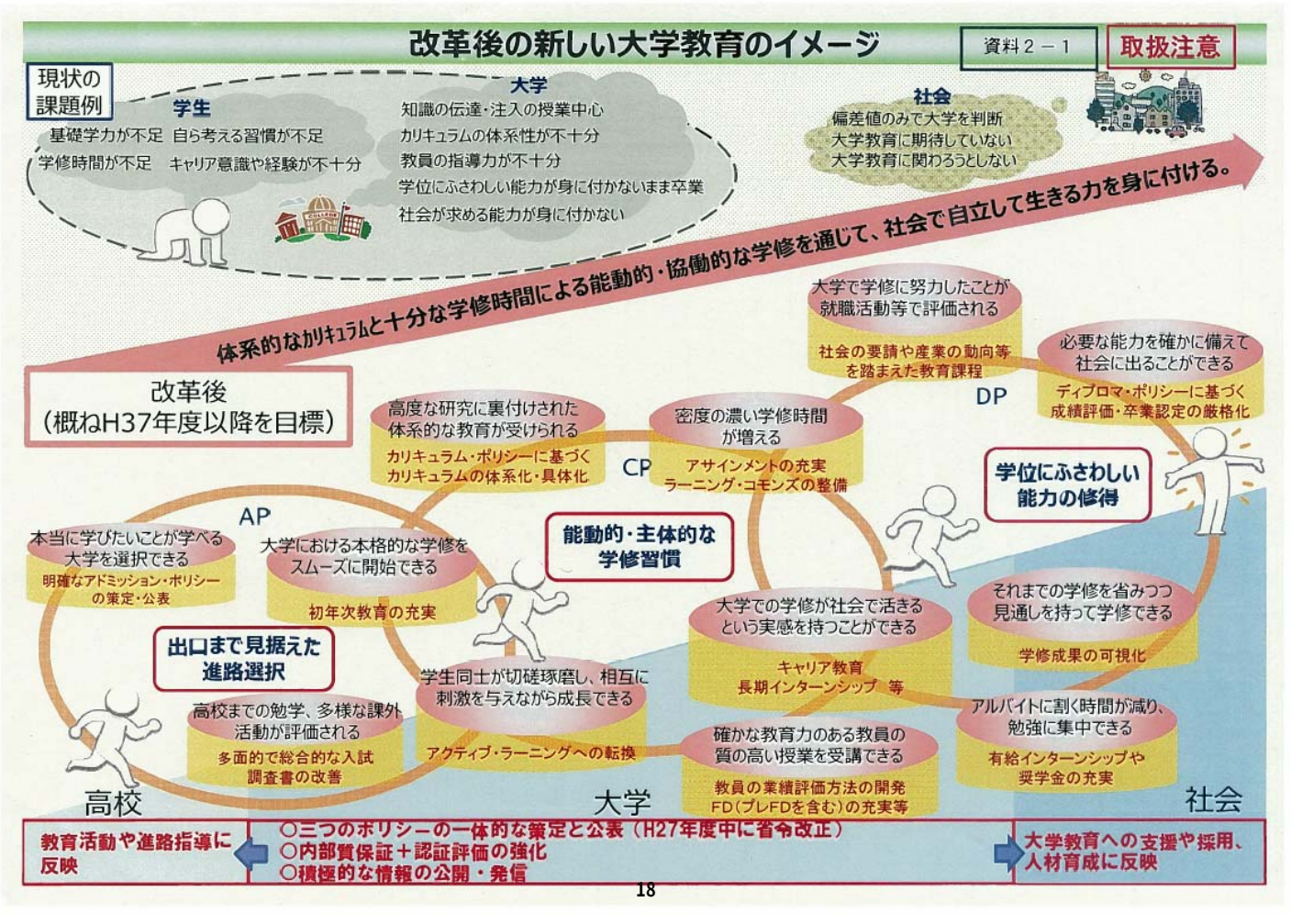
（中央教育審議会答申参考資料より）

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の難易度と大学入学者選抜への活用方策のイメージ



高大接続改革に向けた工程表

		26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度～
各大学の個別選抜改革	法令改正	中教審における審議	三つのポリシーを義務付ける ※アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー 調査評価の評価項目に入学者選抜を明記 ※ 法令改正にあわせて、関係機関・団体と連携して大学入学者選抜に対する評価や情報公開の充実に取り組む					
	大学入学者選抜実施要項見直し	中教審答申の提言に基づき28年度大学入学者選抜実施要項から順次反映						
	アドミッションポリシー明確化	事例集の作成・提供	ガイドラインの作成・提供	各大学におけるアドミッション・ポリシーの明確化				
	財政措置	個別選抜改革を先行して行う大学への取組を推進するとともに、財政措置の在り方を検討し、27年夏を目途に具体策を取りまとめ						
大学入学希望者学力評価テスト（仮） 高等学校基礎学力テスト（仮）	実施内容	専門家会議における検討 ※ 対象教科・科目、「教科型」・「合教科・科目型」「総合型」等の枠組み、問題蓄積、記述式導入方法、CBT導入方法、成績表示の在り方等	「新テストの実施方針」の検討 ※出題内容・範囲、プレテスト内容、正式実施までのスケジュール等	策定・公表	「実施大綱」の検討（新テストの具体的内容） ※高等学校基礎学力テスト（仮称） プレテスト準備・実施、成果や課題を把握・分析	策定・公表 「実施大綱」の検討（新テストの具体的内容） ※大学入学希望者学力評価テスト（仮称）	策定・公表	高等学校基礎学力テスト（仮称）導入 大学入学希望者学力評価テスト（仮称）導入 36年度から新学習指導要領に対応
	実施主体	新テストの実施主体の機能や在り方について検討	新テストの実施主体の設置に必要な法令改正等	実施主体設立・運営				
高等学校教育の改革	学習・指導方法の充実	課題の発見と解決に向けた生徒の主体的・協働的な学習・指導方法の充実に必要な方策について検討。既存の取組も含め、平成27年度以降順次実施						
	教員の資質能力向上	教員養成・採用・研修について、中教審教員養成部会において検討	中教審の審議結果を踏まえた制度改正	制度改正に基づく教員の養成・採用・研修の充実				
	多様な学習活動・学習成果の評価	専門家会議における検討 ※調査書の様式見直し、出願時提出資料の共通様式の策定等	調査書及び指導要録の改訂					
	学習指導要領の見直し	諮問	答申	告示	周知・徹底	教科書作成・検定・採択・供給		34年度年次進行実施
		※ 学習指導要領改訂に係る上記スケジュールは、高等学校の過去の改訂スケジュールに基づくイメージである。						
大学教育の改革	大学教育の質的転換	中教審における審議	三つのポリシーを義務付ける ※アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー SDの組織化をはじめとする学長を補佐する体制の充実を図る	各大学における教育の質的転換				
	学生の学修成果の把握・評価推進	中教審における審議	認証評価制度において学修成果や内部質保証の評価の規定創設	学修成果や内部質保証（各大学における成果把握と改善の取組）に関する評価の推進				
	大学への編入学等の推進	高等学校卒業者等の大学への編入学の制度化 募集単位の大くくり化、入学後の進路変更、学び直しのための環境整備を推進	各大学における編入学の推進、生涯を通じて学修に取り組める環境の整備					



高大接続に関する中教審答申

高等学校と大学の教育を通して育てたい学力

確かな学力：学力の三要素

知識・技能

思考力・判断力・表現力

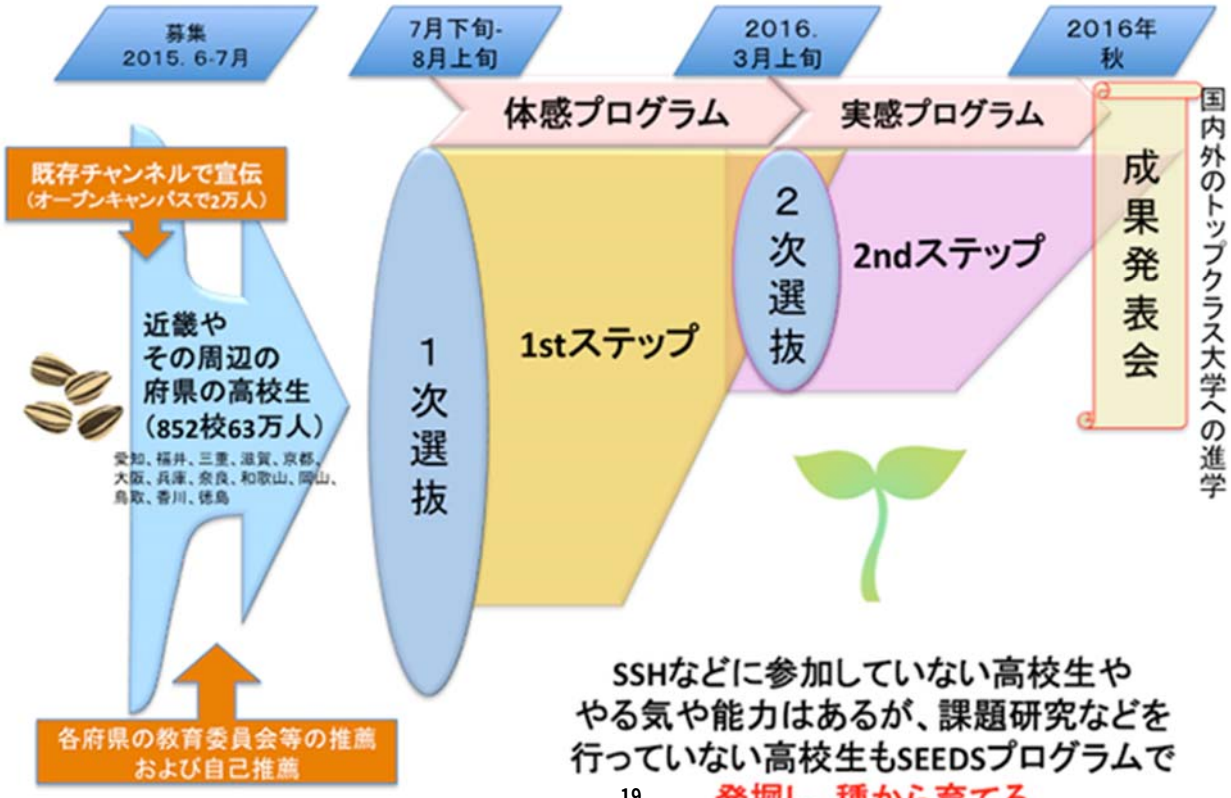
- 知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力

主体性・多様性・協働性

- 主体性をもって多様な人々と協働する態度

SEEDSプログラム

～傑出した科学技術人材発見と早期育成～



大阪大学 SEEDS プログラム

ー「科学って何？」「研究って何？」を知れる ー

ファーストステップ 体感プログラム

科学技術

物質系、生命系、数物系、
応用技術系各コースの講義の受講

科学研究

上記各コースの研究や体験に参加
（例：遺伝子操作体験、施設見学）

国際交流

留学生との交流や異文化交流を体験

SEEDS OSAKA UNIVERSITY

セカンドステップ 実感プログラム

科学技術

物質系、生命系、数物系、
応用技術系各コースの専門基礎
科目等の受講

科学研究

大学の研究室での自主研究、
研究生活体験

国際交流

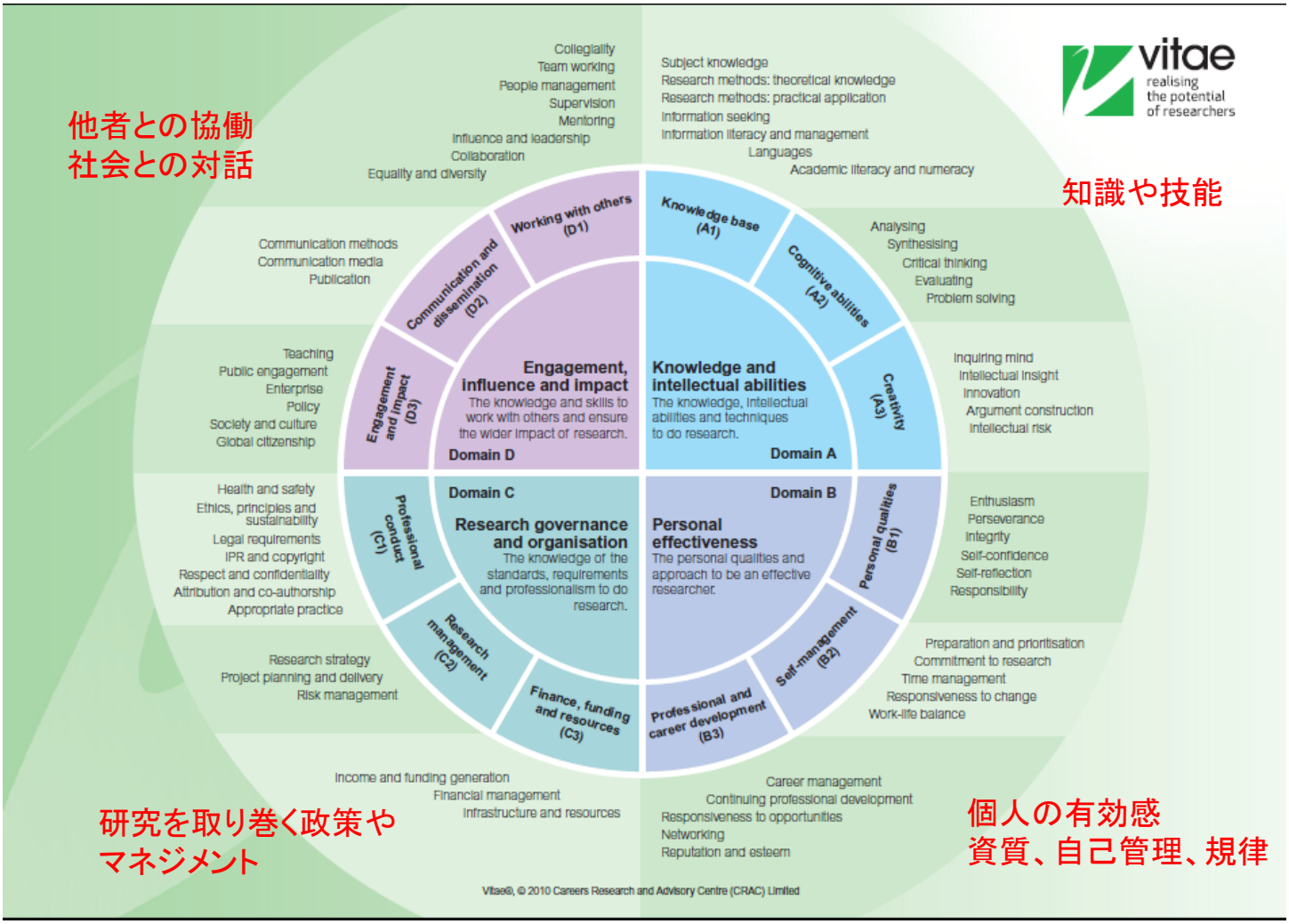
海外派遣及び文化体験

詳しくは　http://seeds.celas.osaka-u.ac.jp/

阪大の教育の現状

- SGUへの対応
- 高大接続の強化
  - 入試改革（一般、推薦、AOの区別の消滅）
- 阪大の教育の特色の堅持と発展
  - 教育のモットー（教養、国際性、デザイン力）
  - 高度教養教育
  - 汎用力（researchers development framework)
- 大学院教育の改革

他者との協働
社会との対話



知識や技能

研究を取り巻く政策や
マネジメント

個人の有効感
資質、自己管理、規律